

# ゴビンダ通信

No 30

発行：無実のゴビンダさんを支える会  
事務局

Justice for Govinda

- Innocence Advocacy Group

May 25.2007

ゴビンダさんの実父、ジャヤ・プラサド・マイナリ氏（86）が、4月27日午前10時30分、イラムの自宅にて心筋梗塞のため逝去なさいました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

Dear kyakuno-san, Namaste ?

おげんきですか？ きのどくなゴビンダ

です。☹️ お父さんのおなぐなりのこと  
きぶんわるくて、またせいしんじょたいも  
かなりわるいのでたまらないです。わたしのこ  
ろのなかにふかいきずが ついてました。いた  
くて、いたくてかまんが できないです。  
でもほくのばえはかまんするしかほか  
のいいみちが ありません。支える会に  
すがみをかきたいですけど お父さんを  
なくなったことが どんなことば「はんご」  
つかって かけは いいのか かきかた  
わからないので なやんで います。

おねがいします。このころほ「そい  
じょたい」で けいむしよの きびしかんきよ  
のなかで どうやって せいかつするの  
か いい advice を おねがいします。

ではまた。



God bless you always.

Your's "INNOCENT" ゴビンダ 7.5.2007.

5月1日に訃報を伝えた時は、比較的落ち着いているように見えたゴビンダさんですが（次ページの「面会報告」参照）やはり日にちがたつにつれ、しだいに心痛が強まってきたようです。このような心理状態で「支える会」に手紙を書いてもらうのは酷なので、今回は客野宛に届いた5月7日付のハガキを掲載しました。

## 面会報告

ネパールの家族からの依頼により、お父さんの訃報をゴビンダさんに伝えるため、5月1日午後3時、事務局の蓮見・客野が、ゴビンダさんの面会に行ってきました。ラダさんと娘たちに会えた余韻もさめないうちに届いた、突然の悲しい知らせでしたが、ゴビンダさんはとても落ち着いた態度で受け止め、お父さんの最期の様子(以下、インドラさんから電話で聞いたこと)に、時々頷きながらじっと耳を傾けていました。

〜〜〜 インドラさんは、お父さんが亡くなる1日前までイラムに行っていた。その時はお元気で、一緒に買い物にも行ったりもしていた。カトマンズに戻った翌朝、お母さんから電話があり、お父さんの具合が少し悪いようだと言われてきた。何度か電話して容態を確認していたが、10時30分、最初の電話から3時間後、たった今、心臓麻痺で亡くなったと電話があった。ほんの30分前には食事して、家族とも笑って話をしていた。お顔はとてもきれいで穏やかで、苦しんだ様子はまったく見られない。インドラさんは亡くなったという電話をもらってすぐに、飛行機を予約し、イラムに飛んだ。翌日、インドラさんの奥さん、ラダさんと二人の娘さん、ウルミラさんも到着した。葬儀と火葬、いっさい滞りなく終えたので、これから13日間は喪に服す。お母さんは、とてもしっかりしていて、健康状態も大丈夫。〜〜〜

「インドラさんは、ゴビンダに知らせてよいだろうかと少し心配していたけれど、私たちとしては、息子に父の死をいつまでも知らせないわけにはいかならなかった」と言う、「もちろん、本当のことを話してくれてよかった。人間は必ず死にます。お父さんはもう歳だから、いつかこういう日が来ると覚悟していた。苦しまずに亡くなったと聞いて安心した。生きて会えなかったのは悲しいけれど、悪いのは警察と裁判所だからしかたない。本当なら13日間、塩断ちや食事制限をして喪に服すのだけれど、ここではできそうもないから、いつかネパールに帰ってからやることにします。お兄さんに、ゴビンダは大丈夫だと伝えてください」と静かな口調で言っていました。〔注:その後、やはり11日から23日まで喪に服すため塩と肉食を断つように配慮してもらったとのこと〕

この日、当局には、あらかじめ訃報を知らせに行くことをファクスで事前連絡しておき、また面会に入る前に処遇担当者と同面談して、訃報後のケアをお願いしました。無期刑が確定してしまったとき(2003年10月)、今生で老親と会えなくなってしまったことを、もっとも深く嘆いていたので、いざその日を迎えたとき、一時的動揺から、何らかの不安定な様子や不注意な言動を示す(あるいはそのように見られる)などして、万が一にも規則違反や懲罰に問われることがあってはと心配していたのです。そのため、当日は、もう作業に戻らなくてよいような時間帯に面会に行きました。幸いなことに、翌日(水)は隔週の休業日にあたっており、翌々日から4連休なので、少なくとも5日間は作業に出ることなく、静かに喪に服すことができるでしょう。もっとも、私たちの心配とは裏腹に、本人は「むしろ作業に集中しているほうが気が紛れる。一人で5日間も部屋にこもっていたら、お父さんのことばかり思い出してしまうて悲しい」と言っていました。しかし、それもまた故人への供養というものではないでしょうか。

## 東京高裁第四刑事部の裁判長交代

東京高裁第四刑事部の裁判長が、5月23日付で、大野市太郎判事から門野博判事(昨年末、名古屋高裁で名張事件の再審開始決定を棄却)に交代しました。今まで以上に力を入れて高裁要請を行います。新しい署名用紙を同封しますので、よろしくお願ひします!

## 2007/3/24無実のゴビンダさん支援集会の報告

「無実のゴビンダさんを支える会」は、結成以来 7 回にわたり、毎年、ゴビンダさん逮捕の時期に、このような支援集会を開催してきました。

今年の参加者は 55 名と人数こそ少なめでしたが、事件から 10 年が経過しても、「東電 OL 殺人事件」はいぜんとして風化していません。むしろ時を経るにつれ、当初のような被害者の特異さに対する好奇心よりも、本当にゴビンダが犯人なのかどうかを疑問視する傾向が強まってきたように感じられます。そのような状況において、昨年10月、日弁連が、ゴビンダさんの再審請求を支援する決定をしたことは、非常に大きな意味を持ちます。宮村弁護士は、基調講演の中で「我々弁護団がゴビンダさんの無実を確信していることは言うまでもないが、日弁連が組織として、ゴビンダさんは無実であるから再審（裁判のやり直し）をしなければならないという認識を公にしたということ。我々の弁護活動が勇気づけられることはもちろんのこと、東京高裁に対しても非常に大きなアピールになった。実質的にも、全国から熱意ある弁護士が弁護団に加わる事が可能になった。また今後、鑑定その他費用をかけた証拠収集をする必要が生じれば、日弁連の経済的支援を仰ぐことができるなど、大きなメリットがある。再審の開始決定を得るという最大目標に向かって邁進する」と力強く語られました。

「支える会」は、いわゆる「現場 100 回」を実践すべく、昨年末から事件現場である喜寿荘 101 号室を賃借し、数回にわたり調査や検証を行ってきました。その過程で制作した『10 年目の現場検証』と題するビデオを、この集会で初めて上映しました。「もし現場と隣接するビルに住むゴビンダさんが犯人だったら、これほど無頓着に被害者の遺体や後日証拠となるコンドームを放置するはずがない。真犯人は、いつ犯行が発覚しても自分に疑いが及ぶことはありえないと確信している行きずりの第三者である」という主張を視覚的に訴えるものです。現場建物の老朽化がすすみ、いつ取り壊されてもおかしくない状況下、このような記録映像を残しておくことは、将来的にも有意義であると考えています。

ゲスト講演者である大阪毎日放送の里見さんは、「冤罪事件の報道番組が少ないのは、端的に言えば視聴率がとれない。つまり一般の関心が低いから」と嘆かれました。しかし、そういう厳しい現実の中で、なお冤罪報道番組を丹念に作り続けておられる姿勢から、「無実の者が有罪にされる不条理を許せない！」という、静かながらも強い怒りが伝わってきました。

日本国民救援会の山田会長は、ゴビンダさんに再審開始をもとめる全国大会の決議にもとづき東京高裁に要請行動を行ったことなど、国民救援会の様々な取り組みについて報告され、「無実の人は、いつか無罪になるという夢を持っている。どんな小さな可能性にも全てを賭け、決してあきらめない。粘り強く支援を続けていこう」と呼びかけられました。

最後に、ゴビンダさん自身がこの集会に寄せたアピール（一部抜粋）を紹介します。

「わたしの人生のいちばんだいじな 10 年間、刑務所のなかでムダになりました。当時 30 才の若いわたしは、髪の毛うすくなったり、白くなったり、としをとって 40 才になりました。人生の“赤字”、もうもどらないです。わたしは、毎日、かみぶくろつくるつまらないしごとをしています。いつもわたしを助けるため、せいっぱい努力している全てのみなさんにかんしゃします。助けてください。これからもよろしくおねがいします」

## 家族来日報告

4月8日、妻ラダさんと長女ミティラさん(15)、次女エリサさん(13)が来日しました。15日間の滞在中、7回に及ぶゴビンダさんとの面会、東京高裁要請、救援会訪問、弁護士との面談、支援者との交流会、在日ネパール人会への働きかけ、メディア取材など、精力的に活動するかたわら、休日には支援者の案内で、東京ディズニーランド、東京タワー、水族館などを訪れ、楽しいひとときを過ごすこともできました。

面会初日。「いよいよお父さんに会えるんだ」とドキドキしている娘たちの前に初めて姿を見せたゴビンダさんは、「なんかこわばった顔してた。ぜんぜん笑ってなかった」そうです。きっとゴビンダさんの方も、娘たち以上に緊張していたのでしょう。あるいは、見違えるように美しく成長した娘たちの姿が眩しすぎたのかもしれませんが。ミティラさんは長女らしく「お父さんは無実だから、必ず帰ってくると信じて待っています。私たちのことは心配いりません」と言えたけれど、エリサさんは「何か話して」と言われても、なかなか言葉が出てきませんでした。ところが、面会回数を重ねるうち、どんどん親子の実感がわいてきて、見る見る打ち解けていきました。歌が得意なエリサさんは、「お母さんと同じくらい大好きになった」お父さんのために、ネパールのラブソングを小さな声で歌ってあげました。～もしあなたが去ってしまったら、私は生きていけません。どうか私から離れないでください～ 澄んだ歌声は、ゴビンダさんの心を癒したことでしょう。

ミティラさんは「将来、何になりたいの?」と訊かれて「モデル」と答えました。すると、「そんな浮ついたものはダメだ。もっと堅実な職業にきなさい」。次のとき、「お父さんのアドバイスにしたがってドクターかエンジニアにします」と訂正したら満足げだったとか(ゴビンダさんたら父親ぶって偉そうに…笑)。そんな微笑ましい家族団欒の様子を聞くにつけ、今回、思いきって娘たちを日本によぶことができ本当によかったとしみじみ思えました。家族来日に際して、カンパをお寄せくださったり、親身にお世話くださった全ての皆さまに、事務局一同、心から感謝しています。これからも力を合わせてがんばりましょう、ゴビンダさん親子に、本当の家族団欒が訪れるその日まで!

## 事務局からのお知らせ

従来、「公開学習会」を年3回開催していましたが、今年は年2回に減らし、1回は内部学習会にあてることになりました。したがって次回の「公開学習会」は秋頃を予定しています。詳細は次号通信にてお知らせいたします。

事務局会議：隔月第2火曜日 午後7時～9時 現代人文社：信濃町駅下車徒歩5分  
<次回は2007年7月10日(火)>

ゴビンダさんに、激励の手紙を出してあげてください。宛先は下記のとおり。

[〒233-8501 横浜市港南区港南4-2-2 ゴビンダ・プラサド・マイナリ]

### 無実のゴビンダさんを支える会 事務局

〒160-0016 東京都新宿区信濃町20 佐藤ビル201 現代人文社気付 TEL:080-6550-4669

e-mail: govinda@jca.apc.org ホームページ <http://www.jca.apc.org/govinda>